

石がふつた家

ムジナモで知られている三田谷の宝蔵寺の関口家にあったおはなしです。

今からちようど、六十年前の春のこと……奥州から十四、五才の小柄な娘が年季奉公にやってきました。

「鉄ピンがないよー。」

「ここにあるよ。」

「ナベのふたがないよー。」

「ここにあるよ。」

という具合にとでもすばしこい娘でした。

しばらくすると、なんとも不思議なことが次々とおこりはじめました。

——うどんをぶち、大がまでうでていると、カマドの火がピョンピョンと裏の竹やぶの方へ飛んでいき、山の中を



とびはねる。家の人が大さわぎをして火を消して台所へきてみると、しょうぎの中のおどんはみんな、なくなっている。

——「ドーン」と大きな音がするのでとんでいってみると鉄のはかり玉が落ちている。「ガチャン」と音がするのでとんでいってみるとピンがわれている。

——「エーン」と赤んぼうの泣き声があるので行ってみると、たしかに奥の座敷のフトンの上にねていたはずなのに石ウスの上で泣いている。「ワーン」と子供が泣くので行ってみると、枕もとに石ころがころがっていて、子供のオデコにコブが出来ている。関口家では、あぶなくてしかたないので、子供達をみんな、親せきや、近所の家へあづけてしまいました。ヤレヤレと思うと、今度は家の人々が御飯をたこうと、カマドの下にワラをくべはじめると、頭の上から、石ころや、カワラかけがふつてくるのです。もうしかたないのでスゲガサをかぶって火もしをしました。

こんな事が続くので、それはそれは評判となり、毎日毎日見物人が関口家の前に集まって来ました。おまわりさんも、消防車もきました。親せき中のだんな達は、夜になると交代でみはりをしました。ムジナかオサキかサンカのしわざかと、人々は噂をしましたが、正体はわかりません。

した。ただ奉公に来ていた娘を親もとへ帰してやったら、二ヶ月も続いたさわぎは納まったということですよ。

※年季奉公（一年間でいくらというお金をもらって働く使用人）

※しろうぎ（直径55cm深さ6cm位の竹であんだザル）

※はかり玉（さおばかりで計る時に使うおもり）

※スゲガサ（す

げであんだト

ンガリ囃子）

※オサキ（飼

主の命令で神

姿不思議なこ

とをするとい

う妖怪きつね）

※サンカ（山

奥や河原で自

然人のような

生活をする人

達）

